

書評

『シリーズ 20 世紀中国史 2 近代性の構造』

(東京大学出版会、2009 年)

吉田 建一郎

本巻は、20 世紀前半の中国社会を近代、近代化、近代性の枠組みから検討することを目的とし、総論（飯島渉「近代・近代化・近代性」）とそれに続く 3 部（第Ⅰ部「政治空間の再編」、第Ⅱ部「社会秩序の変容」、第Ⅲ部「近代化の位相」）10 章の論稿から構成される。

本巻の全体的な特徴を 3 点挙げると、第 1 に「ともすれば、その変化が見失われがちであった 20 世紀前半の中国社会」（3 頁）、さらに同時期の政治、経済が大きく変化したことを具体的に理解できることである。2 つめは、20 世紀前期の中国の変容を、東アジア、世界といった地域的広がりを目を配りながら、また王朝期、人民共和国初期、現在という長期的時間軸の中で捉えることの重要性を確認できることである。3 つめは、20 世紀前半、さらにその後の中国の社会、政治、経済に対し戦争が与えた影響の大きさを確認でき、20 世紀の中国史と戦争との関係について研究を深化させる必要性を感じ取れることである。

各章に対し細かな疑問点がなかったわけではない。例えば、北京政府期、国民政府期に中央・地方関係の改革を試みた当事者たちが「西欧化」や「日本の経験」に抱く意識の強さは、新政時以降も同様であったのか否か（第 1 章）、地方エリートらの力量の拡大をはじめ、地方自治の展開を多面的に論じながらも、清末に地方自治が「発展」したという表現を用いなかった背景は何か（第 2 章）、『歴代輿地図』が作成された清末から 1930 年代初頭の「地理沿革図」刊行の実態は、禹貢学会が「地理沿革図」作成を目指す理由に挙げた文言の通りと捉えてよいか（第 4 章）、2 つの障碍（末端行政の粗放さと下意上達の非公式の「軌道」）が克服さ

れると、国家が農村社会を緻密に掌握することに成功するというシナリオと、国民党による中央・地方関係の近代化が国内外の軍事的要請を契機として進められたという第1章の議論との関係をどう考えるか(第5章)、近代教育導入に対する積極性・消極性と、諸地域の経済的、社会的、文化的条件との間の関連性の有無(第6章)、上海の中間層と東京など他の経済都市のそれとの相違点はどこにあるか(第7章)、為替レートの反騰により大きな影響を受けたのは綿紡績業全体であると捉えることは適当であるか(第8章)、民衆の行動を含む国共内戦の帰趨に対して放送が及ぼした影響はどうであったか(第9章)などが挙げられる。

また、各章に紙幅の制限があることを理解している上での欲張りな要望になるが、より具体的な論及がなされてもよかったのではないかと感じた点もあった。例えば、近代中国の外交のあり方と中国の社会との関係(第3章)、戦前期の刊行物に見られる視点との向きあい方(第9章)、植民地主義の遺産との向きあい方、第2次大戦後における医療・衛生関係の日本人の留用や小宮ミッションの存在(第10章)などである。

本巻のキーワードである「近代性」について評者が強い関心を持ったのは、「近代性」と離心力あるいは格差との関係であった。例として次のような表現が挙げられる。「[地方自治の実施は、]一方では地域エリートらと民衆との間に亀裂を生じさせるような、離心力を作用させる働きがあった」(第2章)、「近代教育による規律化・規範化が、一面で新たな非識字者を生み出している側面はないだろうか」(第6章)、「上海とその他の都市、および都市と農村の格差の拡大もまた、中国の近代の時代相として確認されるべきであろう」(第7章)。このように、「近代性」が離心力を作用させる、あるいは格差を拡大させるという特徴は、20世紀の世界史においてどれほどの普遍性をもつのであろうか。検討を進めるべき課題であると思う。